

妊娠36週4日で分娩となった。羊水による染色体検索では46, XXであった。出生児は2,444gの女児であり出生直後より挿管管理となり、同日緊急開腹術を施行した。手術所見では回腸の軸捻転であり、腸管切除を施行した。術後経過は良好であり、生後48日目に退院となった。本症例では特に分娩終了の時期につき苦慮したが、文献的考察を加え報告した。

7) 上越地区の新生児医療の現況

—当院における6年間の治療成績から—

丸山 茂・竹内 一夫 (新潟県立中央病院 小児科)
須田 昌司

上越地区は18市町村よりなり、人口26万人、年間出生数は約2,500人である。低出生体重児は増加傾向を示し、全出生数に占める割合は平成6年で既に7%を越えている。当院は中核病院として新生児医療を行ってきたが平成2年から平成7年の6年間に入院した出生体重1,500g未満児は前半3年間の7名から後半3年間の28名へと4倍にまで増加し、収容能力は限界に達している。しかし収容数は地区の2/3に過ぎず、残りを他地区に依存せざるを得ない。当院での妊娠30週未満児(24~29週)の後遺症なき生存率は12/15=80%と集中医療の効果は大きい。今後も需要は大きくなると考えられ、医療スタッフ、設備、器材の充足が急務と考えられる。

8) 体重3kg未満の心臓手術症例の検討

金沢 宏・山崎 芳彦 (新潟市民病院 心臓血管外科)
高橋 善樹

体重3kg未満児の心臓手術について検討した。非開心術は7例に対し9回施行した。3例が開心根治術に至り、1例が生存した。大動脈縮窄症に対する成績が悪く改善の余地があると考えられた。また低体重手術例では人工呼吸管理に注意が必要であった。

開心術は、9例に9回施行された。TAPVR, TGA, 大動脈離断症で2.5kg以上の症例が生存していた。2.5kg以上あれば開心根治術は十分可能であった。しかし複雑心奇形や姑息的開心術では手術成績はいまだ不良であった。今後も工夫により手術成績は向上するものと考えられる。

9) 当科における先天性食道閉鎖症例の治療成績

新田 幸壽・大谷 哲士 (新潟市民病院 小児外科)
大石 昌典・坂野 忠司
永山 善久・山崎 明
小田 良彦 (同 小児科)

当院小児外科及び小児科にて過去8年間に8例の食道閉鎖症を経験した。治療法などについて検討したので報告する。

全例院外出産児であったが、早期に異常を指摘され0生日に紹介入院となり、肺炎や無気肺の合併は見られなかった。心疾患として3例、鎖肛として1例、残り4例は食道閉鎖として紹介された。全例グロスC型で、合併奇形としては、心奇形が4例(すべて18トリソミー)、鎖肛1例、高位空腸閉鎖1例があった。

4例の18トリソミーに対しては、根治手術を施行せず、3例に腹部食道のバンディングと胃瘻造設を行い、残り1例には全く手術を施行しなかった。これらは全例死亡した。

一方根治手術(一期的根治手術)を施行した4例は全て救命した。吻合は、2.5~3倍の拡大鏡を使用して、下部食道の口径に合わせるように上部食道の先端を一部切除して全層一層吻合にて行った。縫合不全、吻合部狭窄や胃食道逆流も無く順調な術後経過であった。

10) 小児卵巣嚢腫の治療

松田由紀夫・近藤 公男
八木 実・内藤 真一
内山 昌則・岩淵 眞 (新潟大学小児外科)

過去16年間に小児卵巣腫瘍19例を経験し、17例に手術を施行した。病理組織学的診断では奇形腫群腫瘍は12例で、2例が悪性腫瘍(卵黄嚢癌, Dysgerminoma)であった。顆粒膜細胞腫と視床下部腫瘍(過誤腫)による卵巣腫大が各1例、卵巣嚢腫は3例であった。17例中9例に茎捻転を認め、うち6例は卵管・卵巣切除術を施行した。

出生前診断された4例中2例では日齢85、日齢126に嚢腫の自然縮小、消失が確認された。茎捻転の1例は日齢30に開腹したが虚血による変性が強く卵管・卵巣切除を行った。嚢腫の増大を認めた1例は日齢144に開腹し嚢腫部分切除を施行した。出生前診断例では自然縮小もあり、画像診断、治療法の選択は慎重に行う必要がある。